

黒川本紫日記簡注（六）

笹川博司

凡例

本稿は、宮内庁書陵部蔵『紫式部日記』（黒川家旧蔵「紫日記」）を底本とする注釈で、本誌前号所載（五）に続くものである。

凡例の詳細は、前号に従う。

寛弘五年（一〇〇八）十月十六日、一条天皇は土御門殿に行幸した。御前での女房の衣裳や、帝の初めての若宮との対面場面などが、紫式部の目を通して記される。

46

みすの中を見わたせば、色ゆるされたる人々は、例の、あを色、あか色のからぎぬに、地ずりの裳。うはぎは、お

しわたして蘇芳すほうのおり物なり。ただ、むまの中將ぞ、えびぞめをきて侍し。うちものどもは、こきうすき紅葉をこきまぜたるやうにて、中なるきぬども、例の、くちなしのこきうすき（「上57」、紫苑色しせん、うらあをき菊を、もしは三へなど、心々こころなり。

【簡注】○色ゆるされたる人々、禁色を許されている女房たち。『満佐須計装束抄』（群書類従・八輯）卷三「女ばうのさうぞくのいろ」を論じた箇所「上らう女ばうのいろをゆる（聴）といふは、あをいろ・あかいろのおり物のからぎぬ、地ずり（摺）のも（裳）をきるなり」（八六頁）とある。これによると、「色ゆるさる」とは、青色または赤色の織物の唐衣と地摺ちすりの裳の着用が許されるということだと知られる。「地摺」は、生地きぢに、型紙や型木などを用いて

文様を摺り染めた布帛（木綿と絹）。『うつほ物語』に「ぢずりの裳、むら濃の腰さして、唐の糸木綿、赤色の二藍重（ねて、からぎぬ着給へり）」楼のうへの下・一八七二など。『紫式部日記』にも若君御五十日の場面での色ゆるされた乳母の衣装が「あか色のからの御ぞ、ぢずりの御裳、うるはしくさうぞきたまへる」と記され、また、正月の中宮の御膳の御給仕担当となった大納言の君の衣装が「からぎぬは、あか色、地ずりの裳」などと書きとめられている。晴れの場では、「赤色の唐衣に、地摺の裳」というのが典型的な衣装だった。○うはぎ 女房装束で、重桂の一番上に着る桂。普通、五衣の上、唐衣の下になる。一様に、「すはう」の織物の表着という。「すはう」は、インド、マレー原産のマメ科の落葉小高木。蘇芳・蘇方・蘇枋などの漢字を当て、蘇芳の木の子葉や心材に含まれる色素ブラジレンが灰汁媒染によって発色する。紅の、やや紫がかった色相。『源氏物語』では、六条院行幸の折の、舞の童の衣装に「青き赤き白椽（しつるほみ、すはう、葡萄染めなど、常のごと）」（藤裏葉・一〇一八）など。皆が蘇芳を着ている中で、「馬の中将」だけは「葡萄染め」（ブドウの実の色、薄い紫色）の織物を着ていたという。「馬の中将」は、十一月十

七日の里内裏一条院への還御の場面にも見え、大納言君と宰相君、小少将君と宮内侍、がそれぞれ牛車に乗ることに成り、馬中将は紫式部と同乗することになった。馬中将が「わろき人とのりたり」と不快感を露わにしたので、式部は「むまの中将のきみをさきにたて」て機嫌をとったという。馬中将は、左馬頭藤原相尹女。相尹の父は兼家の異母弟遠量であり、母は左大臣源高明四女であり、道長の妻明子の姪であった。その家格は紫式部より上で、中宮女房としての経験年数も式部より長かったのである。そのため、馬中将は式部を自分より下位の者と見ていたらしい。福家俊幸『紫式部日記の表現世界と方法』（武蔵野書院・平成十八年九月）所収「むまの中将」は、「二人の反目」について「むまの中将が明子に縁故を持つ女房であり、作者が倫子に近い女房であったことが大きく関わっている」という。○うちもの 礎で打った衣。打衣に同じ。よく打って練り、糊を落として柔らかくするので「かいねり」とも。地質は綾、平絹。地文は菱が普通。色は紅で、「くれなゐ」ということもある。「濃き薄き紅葉をこき混ぜたるよう」だという。略されることもあるが、表着と五衣との間に着る。○中なるきぬ 打衣と単衣の間に重ねて着る

桂。いつものように、「くちなし」の濃き薄き、紫苑色、裏の青い菊襲を、五枚もしくは三枚重ねるなど、思い思いだという。「梔子色」の襲の色目は、表裏ともに黄色とされる。『古今集』に「山吹の花色衣ぬしやたれ問へど答へずくちなしにして」（誹諧歌・一〇二、素性）とあるように、クチナシの実で染めた梔子色は、山吹色に近い。『延喜式』巻四十一に「凡ソ、支子染ノ色ノ、黄丹（赤みの多い黄色）ヲ濫ズベキ者ハ、服用スルコトヲ得ズ」とある通りである。色目としての「梔子色」も、山吹襲（表朽葉、裏黄）と同様の色調であろうと推測される。しかし、全注釈（上・三九頁）が指摘するように、梔子襲を記載した文献は確認できない。クチナシの実は秋のものだが、クチナシの花は夏に咲くものなので、あるいは、「紫苑」（表薄色、裏青）「菊」（表白、裏青）と並ぶ、秋にふさわしい襲の色目として「くちは（朽葉）、じ（櫃）のこきうすき」というのが、もとの本文だったのかもしれない。早い時期に「、」が欠脱して「は（字母考）」を「な（字母名）」と誤写されてしまった可能性も考えられる。なお、「朽葉」「櫃」の襲の色目は、それぞれ、表朽葉・裏黄、表赤・裏黄である。そもそも、一条天皇の土御門殿行幸のあった寛弘五年

は、湯浅吉美編『増補日本暦日便覧』（汲古書院・平成二年）によると、九月三十日が立冬で、十月十六日は小雪に当たる。すなわち、既に冬である。衣装は季節を先取りするのがよいとされるが、初冬にふさわしい衣装では雪の白さが目立って寂しいので、晩秋の紅葉を基調とした襲の色目選ばれたらしい。

【参考】『栄花物語』に「みすのうちをみわたせば、れいのゆるるされたるは、あをいろ、あかいろのからぎぬに、地ずりのもの、うはぎは、お（を）しわたしてすはうのお（を）り物なり。うち物ども、こきうすきもみぢをこきまぜたるやうなり。又れいの、あをうきなるなどまじりたり」（はつはな、二・四六二）など。

47

あやゆるるされぬは、例の、おとなおとなしきは、無文の、あを色もしは蘇芳など、みな五へにて、かさねどもはみなあやなり。おほうみのすり裳の、水の色、はなやかに、あざあざとして、こしどもはかた文をぞ、おほくはしたる。うちきは菊の三へ五へにて、おり物はせず。わかき人は、菊の五へから衣を心々にしたり。うへはしろく、

あをきがうへをば蘇芳すほう、一えはあをきもあり。うへうす蘇芳すほう（「上かみ」）、つきつきつきき蘇芳すほう、中にしろきませたるも、すべて、しぎま、をかしきのみぞ、かどかどしく見ゆる。

いひしらずめづらしく、おどろおどろおどろしきあふぎども見ゆ。

【簡注】○あやゆるされぬは 禁色の綾織物の着用を許されない女房たちは。「許されない」のは、唐衣で言えは、色と綾（織物）という二つの要素がある。それぞれ一方の要素に注目すると、「色ゆるされぬ」とも「綾ゆるされぬ」とも言い得るのである。前段の「色ゆるされたる人々は」に対応して、漢詩文の互文のような修辞で「綾ゆるされぬは」という。「綾ゆるされぬ人々は」の意である。それぞれ「例の」（いつものように）という語句を置いて対句的に述べる。○おとなおとなしきは 年配者は。後の「わかき人は」に対応。「おとなおとなし」は、いかにもおとなびているさま。おとならしく落ち着いているさま。『源氏物語』に「女房なども、おとなしくしきはすくなく、わかやかなるかたち人の、ひたぶるにうちはなやぎ、さればめる

はいとおほく、かずしらぬまでつどひさぶらひつ、」（若菜上・一一〇九）など。○無文むもん 文様がないこと。あや、飾りのないことで、綾織りの地文のない絹、すなわち平絹の唐衣である。「むもんの唐衣」「あを色のむもんのから衣」と既出。しつかりした年配の女房たちは、綾（織物）でなく平絹の、青色や赤色（蘇芳）の唐衣を着用するのである。○みな五へえにて、かさねどもはみなあやなり みな五重であつて、下四枚の重ねはすべて綾である。次の文が「裳」についての記事なので、ここまでは「唐衣」についての説明と考えられる。すなわち、五重の唐衣で、下の四枚は綾織物という。青色または蘇芳色の濃淡五枚を重ねた唐衣を着ていたとする説と、袖口や裾の部分の裏地を、表に折り返して縁のように縫い付けた、所謂「ふき（襪）」が五重であつたとする説がある。後の「菊の五へえのから衣」の注を参照のこと。○おほうみのすり裳ものの 大海の摺裳の、水の色は、華やかで、鮮やかな感じがして、裳の腰や腰紐などは固文を、多くの人はしている。「かたもん（固紋・固文）」は、綾の織物の文様の緯よこいとを浮かさないで固く織つたもの。緯たていとに経よこいとをからめて織つたもの。「うきもん（浮紋・浮文）」に対する。『蜻蛉日記』下巻に「かた文うへの表

袴つやつやとして」など。○うちきは菊の三へ五へにて桂は菊襲の三重や五重であつて、織物は使用していない。女房装束の重桂の菊の色目は、蘇芳の濃い色から薄い色へ配色する「蘇芳の匂ひ」を五枚、その下に白を三枚重ねるといふもの、また、表着は白、五衣は、白、白、薄紫、薄紫、紫、単衣は朱と重ねて着るといふもの、あるいは、上が白、中が薄紫と少し濃い紫、下が緑といふものなど様々で、秋に着用した。○わかき人は「おとなおとなしき」に対応。若い女房は。○菊の五への中から衣 菊襲の五重の唐衣を思い思いに着用している。「菊の五重の唐衣」を「菊ノ五重ノ五ツ衣ニ、唐衣ヲ着タルライフ。五ツ衣ニ唐衣具シタルヲいつへのから衣ト云ヘルナルベシ」という黒川真頼の説を紹介した亀鑑(五〇三頁)以来、新全集(二五五頁)まで重桂の上に唐衣を着ていると解釈し、また、全注釈(上・四〇一頁)以来、全訳注(上・一六二頁)笠間文庫(六五頁)まで「袖口や裾に菊重ねの五重の袴をほどこした唐衣」「袴の重ね」とする。しかし、中嶋朋恵「紫式部日記の服飾描写私見」(「国文学言語と文芸」第八十七号)を引用し、攷(二五四頁)は「五重に仕立てられた」唐衣であつたとし、角川文庫(五七頁)も「唐衣を五枚重

ねていた」とする。『源氏物語』に「みへがさねのからぎぬ、ものこしもみなけちめあるべし」(宿木・一七三〇)などと、三重襲の唐衣というものが見えるので、五重の唐衣というものの存在を認めてよいだろう。○うへはしろく上は白く、青い色の上を蘇芳、一重は青い色もある。上が薄蘇芳、次々に濃い蘇芳で、中に白い色を混ぜているのも、すべて、仕立て方の、趣のあるものは、ほんとうに才気があると見える。「菊の五重の唐衣」を思い思いに着用している様相を説明する。「かどかどし」は、才能がある。才気に満ちている。『源氏物語』に「心ばへもかどくしう、かたちもをかしくて」(賢木・三七三)など。○いひしらず 言いようもなく素晴らしく、たいそう派手な扇がいくつも見える。「いひしらず」は、言いようもない、何とも形容できない、という意の慣用句。善悪、好悪、貴賤などの両極にいう。『源氏物語』に「しろききぬの、いひしらずす、けたるに」(末摘花・二二八)など。

【参考】『栄花物語』に「いろゆるされぬは、むもん、ひらぎぬなどさまなり。したぎみなおなじさまなり。おほうみのすりも、みづのいろ、あざやかになどして、これも、いとをかしうみゆ」(はつはな、二・四六二)など。

うちとけたるをりこそ、まほならぬかたちもうちまじりてみえわかれけれ、心をつくしてつくるひ化粧けしょうじ、おとらじとしたてたる、女糸のをかしきに、いとよようにて、としの程ほどの、おとなび、いとわかきけぢめ、かみの、すこしおとろへたるけしき、まださかりのこちたきがわきまへばかり見わたさる。

さては、あふぎよりかみのひたひ（上巻）つきぞ、あやしく、人のかたちをしななじなくもくだりてももてなすところなんめる。かかる中にすぐれたりと見ゆるこそ、かぎりなきならめ。

【簡注】○うちとけたるをりこそ 寛いでいる折はそれこそ、整わない容貌も混ざって自然と区別がつくけれど、心を尽くして飾りたて化粧し、劣るまいと着飾っている今は、女絵の美しいものに、たいそうよく似て、年齢の、年配か、若年かの区別、髪かみの、少し薄くなっているか、まだ盛りで豊かかの相違だけが見渡される。「まほなり」は、物事が完全であること。そなえるべき条件がよく整い備わっていること。また、そのさま。「かたほ（偏）」に対す

る。中古以降、「まほならず」の形で盛んに用いられる。『源氏物語』に「かうやうなる折のまほならぬ事かず／＼にかきつくる」（賢木・三七四）など。ラ行四段動詞「うちまじる」は、混じっている。『源氏物語』に「うちとけたる御有さま…ゐ中びたることもうちまじりてぞ」（東屋・一八五〇）など。ラ行下二段動詞「みえわかる」は、自然と区別がつく。『源氏物語』に「まことのもの、上手は、さまことにみえわかれ侍」（帚木・四七）など。「うちとけたるをりこそ」を受けて「みえわかれけれ」は、強調逆接。「…つくるひ化粧し…したてたる」現状に対する。タ行下二段動詞「したつ」は、目的に合った、望ましい状態につくりあげる、仕上げる。ここでは、特に、衣服や化粧についていう。『源氏物語』に「ものきよげに、いまめきて、そのものともみゆまじう、したてたるやうだいなどの、ありがたう、をかしげなるを」（少女・六九七）など。「わきまへ」は、弁別。物事の違いを識別すること。「けじめ」（区別）に対応する。『源氏物語』に「きゝしるばかりのわきまへは、なにごとにも、いとつきなうは、はべらざりしを」（紅梅・一四五二）など。○さては、あふぎよりかみのひたひつきぞ そして、扇より上の額の格好が、不思議な

ことに、見たところ、人の容貌を上品にも下品にも見せる所であるようだ。このような中で優れていると見える人こそ、この上なく素晴らしい人なのであろう。「しなじなし」は、素性がよい、上品である。『源氏物語』に「れいの、しなくしからぬけはひ、さへづりつ、いりきたれば」(浮舟・一八七七)など。「下る」は、高い所から低い所へ移り動く。「品々し」に対して、品格の低いことをいう。『源氏物語』に「たかきもくだれるも、おしみあたらしからぬはなきも」(柏木・二二六四)など。「もてなす」は、ここでは、「もて」が接頭語に近く、ほぼ「なす」に同じ。『源氏物語』に「心にく、もてなしてやみなむとおもへりし事を」(末摘花・二二七)など。「なんめる」は、断定の助動詞の連体形「なる」に、視覚による推量の助動詞の連体形「める」が付き、撥音便化したもの。

49

かねてより、うへの女房、宮にかけてさぶらふ五人は、まゐりつどひてさぶらふ、内侍二人、命婦ふたり、御まかなひのひとひとり。

おものまゐるとて、筑前、左京、ひととのかみあげ

て、内侍のいで入すみのはしらもとよりいづ。これは、よろしき天女なり。左京は、あを色に、やなぎの無文のから衣、筑前は、菊の(上60)五へのからぎぬ、裳は例のすりもなり。

御まかなひ、橘三位。あを色のから衣、からあやのきなる菊のうちきぞ、うはぎなんめる。一もとあげたり。はしがぐれにて、まほにもみえず。

【簡注】○かねてより、うへの女房、宮にかけてさぶらふ五人 以前から、内裏女房で、中宮女房を兼任して伺候する五人は、参集してお仕えする、内侍二人、命婦二人、若宮の身辺などを整えて世話する女房一人。「かけて」は、兼ねて。ひとりで二つ以上の働きや役目をする。『伊勢物語』六九段に「国のかみ、いつきの宮のかみ、かけたる」など。「五人」は、既出の左衛門内侍、弁内侍という「内侍二人」に、これから記述する筑前、左京という「命婦ふたり」、そして「御まかなひのひとひとり」である。この最後に一人について、評伝(二二六頁)は「すぐ後に「御まかなひ橘の三位」とあることから諸注は橘徳子としているが、身分の高い橘三位を最初に挙げず、末尾に「御まか

なひの人一人」と名も示さずに記していることは不審である。これは徳子ではなく若宮の御まかない役として派遣されていた内裏女房であろう」とする。全注釈(上・四〇六頁)は「奥歯に物のはさまった迂遠な表現をしたところに、橘三位に対する紫式部の疎外的な感情が微妙にあらわれている」と解釈するが、近代的な解釈と言わざるを得ないであろう。○おもひのまゐるとて 帝に御膳を差し上げるといので、筑前、左京は、一本の髻を結び上げて、内侍が出てきた隅の柱のもとから出る。「おもひのまゐる」は、史料二ノ六(二二三頁)『不知記』に「左大臣、皇子ヲ抱キ、御前ニ進候ス。暫ク懐スト云々。大臣退出ノ後、朝干飯ノ膳ヲ供ス(乳母從三位橘朝臣徳子、勅シテ陪膳ス。供奉ノ内侍以下、御盤ヲ取リテ之ヲ役ス)」、『御堂関白記』寛弘五年十月十六日条に「御前ニ參ル。若宮ヲ見奉リ給フ。余、抱キ奉ル。上又抱キ奉リ給フ。其ノ後、上卿ノ座ニ着ス。盃酌數献。此ノ間御装束ヲ脱シ給フ。朝干飯ノ如ク、御膳ヲ供奉ス。陪膳三位徳子」とあるように、実際には、一条天皇は若宮との対面の後に食事をとったのであるが、式部は順序を入れ替えて記述している。「筑前」は既出。「左京」は「左京の命婦」とも。「左京命婦」は、『権記』長保元年

(九九九)七月廿一日「交易ノ絹ヲ以テ、女房ニ支配ス；左京」、『左経記』長元九年(一〇三六)五月十七日「素服ヲ給フ可キノ男女；女房十八人」の割注に「左京命婦」と見え、一条天皇や後一条天皇に奉仕した内裏女房だったことが知られる。『赤染衛門集』に「一条院にさぶらひし左京の命婦、いづみのかみのめにてくだるがいひたる／都路の心もしるくしをりして君だにあるとおもふみちかな／返し／しをるともたれかおもひし山みちに君しも跡をたづねけるかな／又これより、いかでみづからなどいひて／あはじてふみちにだにこそあふと聞けただにてすぎむ人のつらさよ／かへし、命婦／山をだに思ひへだてぬみちなればこれよりすぎむ心ちやはする」(一八七―一九〇)「あまり(いに)なるべしときく人にす(イずゞ)をおこせて、一条院左京命婦／浦山しいかなる人かわがさめぬ夢まほろしのよをそむくらん／えたる人にかはりて／つらぬける玉のひかりを頼むともくらくまどはむ道ぞかなしき」(二二三・二二四)などが見え、赤染衛門と和歌を贈答する歌人であったこと、和泉守の妻として和泉国に下ったことがあること、出家願望があったことなどが知られる。『赤染衛門集全釈』は、この「和泉守」を「前和泉守橘道貞か」とするが、直

前の一八一―六番歌には、道貞との関係や道貞の動向に關連する和泉式部と赤染衛門集の贈答歌が配列され、そこでは「道貞」という名で表記されているのに、続く詞書で何の説明もなく道貞を「和泉守」と官職で呼ぶのは不自然である。『権記』には長保六年（寛弘元年）正月五日「和泉前守道貞朝臣ヲ饒ス」と見え、『御堂関白記』寛弘元年十一月九日に「奉幣使ヲ立ツ。和泉守脩政」とあるので、和泉守の、橘道貞の後任には藤原脩政が任ぜられたことが知られる。寛弘元年によって、一八三番歌の詞書に「道貞みちのくにになりぬ」と聞きて、和泉式部にやりし」、一八五番歌の詞書に「道貞くだるとて」とあるので、一八七番歌の詞書に「いづみのかみ」は、後任の藤原脩政とみるのが妥当であろう。脩政は『尊卑分脈』によれば為頼男で、為時女の紫式部にとつて従兄弟になる（岩野祐吉「紫式部日記人物考」。「内侍のいで入」は、「内侍のいでつる」が「内侍のいでいる」と誤写され、漢字表記となつたものか。『采花物語』巻八には「おもものまゐるとて、みな、かみあげて、内侍のいでつるみすぎはより、いでいりまるり」（はつはな、二・四六二）とある。○これは、よろしき

天女なり（内侍に比べて）この命婦二人は、相当な天女である。皮肉がこもる。左京は、青色の表着に、柳襲で文様のない唐衣、筑前は、菊襲の五重の唐衣で、裳は例の如く摺裳である。「青色」は、本来は、黒と白との中間の範囲を示す広い色で、主に青、緑、藍などをいう。『枕草子』に「あを色の淵こそをかしけれ。藏人などの具にしつべくて」（淵は）など。『源氏物語』にも「六位の中にも藏人はあをいろしるく見えて」（濔標・五〇〇）とあるように、六位の藏人に許された禁色で、天皇の褻の袍の色であつた麴塵まじり。古くは刈安かりやす、紫草の根に灰を加えて染めたが、後世は緯いとは黄、経なでは青を用いて織る。灰黄緑で、山葵色なまひやオリブグリーンに近い。ここは、袍ではなく、「わらは、あを色にやなぎのかざみ、山ぶきがさねのあこめ、きたり」（絵合・五六九）のように、青色（麴塵）の表着に、左京命婦は柳襲（表白、裏青）、筑前命婦は菊襲（表白、裏蘇芳）の唐衣を着用する。底本「から衣は」。諸本に従う。○御まかなひ、橘三位。御食事の陪膳は、橘三位。青色の唐衣で、唐綾の黄菊襲（表黄、裏青）の桂が、表着であるようだ。髻を一本上げている。柱の陰に隠れて、完全には見えない。「からあや」は舶来の綾織物。橘三位徳子は、藤原

有国の妻。有国は、『公卿補任』によると、長徳元年（九五）十月十八日から長保元年（九九九）閏三月五日まで大宰大貳の官職にあった。この事実から、全注釈（上・四〇九頁）は、その妻徳子は「舶載の唐物を豊富に所有していたであろうことが察せられる」とする。『源氏物語』では六条院の女楽における明石女御の童女の装いを「青色に蘇芳の汗衫かきみ、からあやのうへのはかま、裯あゆは山吹なる唐の綺き」（若菜下・一一四八）とする。「表着なんめる」の「なん」は、断定の助動詞「なり」の連体形「なる」の撥音便化したもの。「める」は、視覚による推量の助動詞「めり」が、「黄なる菊の桂ぞ」を受けて連体形で結んだもの。続く「柱隠れにて、まほにも見えず」と連関する。「はしらがくれ」は、名詞で、柱の陰に隠れること。『源氏物語』に「はしらがくれに少しそばみたまへりつるを、引き寄せ給へるに」（野分・八七四）など。「まほ」は、形容動詞で、完全、正式なさま。直接、まともなさま。『源氏物語』に「今は、まほにも見えたてまつり給はず」（横笛・一二七二）など。「まほならず」の用例も多い。

【参考】『栄花物語』に「内の女房も、みやかけたるは、四人まゐりつどひたり。内侍二人、命婦ふたり、御まかな

ひの人ひとり。おもものまゐるとて、みなかみあげて、内侍のいでつるみすぎはよりみすぎはよりいでいりまゐる。御まかなひ、藤三位。あかいろのからぎぬに、きなるからのあやのきぬ、きくのうちぎ、「うはぎなり。筑前・左京なども、さま／＼みなしたり。はしらがくれにて、まほにもみえず」（はつはな、二・四六二）など。

50

殿、わか宮いだきたてまつり給て、おまへにゐてたてまつり給。うへ、いだし、うつしたてまつらせ給程、いささか、なかせたまふ御こゑ、いとわかし。弁宰相の君、御はかしとりてまゐりたまへり。もやの中どよりにしに、このうへおはするかたにぞ、わか宮はおはしませたまふ。

うへ、外とにいでさせ（上61）給てぞ、宰相の君はこなたにかへりて、

「いと顕証けんじょうに、はしたなき心ちしつる」

と、げに、おもてうちあかみてゐたまへるかほ、こまかに、をかしげなり。衣の色も、人よりけに、きはやし給へり。

【簡注】○殿、わか宮いただきましたてまつり給て 道長殿は、若宮を抱き申し上げなさて、御前に若宮をお連れ申し上げなさる。「ゐて」は、諸本「いて」。大秀解（二五五頁）に「いては若率⁺てもあらんか」と見えるが、新釈（二五六頁）以前は「御前に出で」と解釈されてきた。しかし、名古屋市立図書館本を底本とした岩波文庫（三五頁）によって初めて「ゐて」が採用され、その後発見された黒川本に「ゐて」とあったことにより、以降の注釈はすべて「ゐて」を採用する。例外は角川文庫（六〇頁）で、本文を「いで」とし、「お出まし申し上げる」と訳す。○うへ、い^{*}だき、うつしたてまつらせ給程、いささか、なかせたまふ御こゑ 帝が、若宮をお抱きになり、（その後、再び殿に）若宮をお移し申し上げあそはず際、少し、若宮のお泣きになる御声は、実にあどけない。「いだきうつし」と読点を付さず、全書（二四三頁）の頭注が「主上が新皇子を抱きとりなさる」と解して以降、諸注それに従い、「いだきとる」（両手で受けて自分の手に抱く、抱き取る）の意に解している。しかし、「いだきうつす」と「いだきとる」では明らかに意味が異なるだろう。「いだきとる」は、『源氏物語』に「むつかしげにおはする程を、たえずいだきとり給

へば」（若菜上・一〇九二）、「いだきとり給へば、いと心やすくうちゑみて」（栞木・一二五一）などに見えるように、当時から既に存在している語であるにもかかわらず、その語を用いないで「いだきうつす」と表現されているこの箇所は、別な内容を意味している可能性が十分にある。この「うつす」は、補助動詞「たてまつる」が付くことから若宮についての表現であることが知られ、若宮を抱いて別の場所に動かす意であろうと予想される。『源氏物語』に「後涼殿にもとよりさぶらひ給ふ更衣の曹司を、ほかにうつさせ給て」（桐壺・七）「東山の辺にうつしたてまつらん」（夕顔・一二八）などあるように、若宮を「うつす」のは、帝の手の中から「ほかに」と解するのが自然であろう。「いだきうつす」という複合動詞の用例はなく、諸本に異同もない。ここは「上、抱きたてまつらせ給ひ、移したてまつらせ給ふ程」という並列する二つの動詞「抱く」「移す」を含む文脈を、連用中止法によって繋いだ文が「上、抱き、移したてまつらせ給ふ程」だったのではないか。そう解釈して「いだき」と「うつし」の間に読点を入れて本文を作成した。若宮は、初対面の帝に抱き取られて驚いて泣いたのではなく、安心できる徳の高い父宮である

帝から離れたくないと思ってお泣きになったのだ、という紫式部の含意を読み取るのが当時の意識からは妥当かと考えられるのである。「いささか」は、漢語「聊」あるいは「些」の訓読語で、少し、わずかに、の意の副詞。『源氏物語』に「君は、いさ、かひまありておぼさる、時は、めしいで、つかひなどすれば」(夕顔・一三六)など。「わかし」は、いかにも、ある物が現れてからの時間が短いというようなさま。声や様子などが、子どもらしい。あどけない。『源氏物語』に「少納言がもとに寝むとのたまふこゑ、いとわかし」(若紫・一九一)など。○弁宰相の君、御はかしとりて 弁の宰相の君は、帝から賜った若宮の守り刀を手にとつて参上なさつてゐる。母屋の中戸より西、殿の北の方のいらつしやる所に、若宮をお連れなさる。「弁の宰相の君」は、若宮の乳母。道綱女豊子。「母屋の中戸より」の「より」を、空間的起点を示す格助詞とみるか、經由地を示す格助詞とみるか、両説ある。龜鑑(五〇九頁)・岩波文庫(三四頁)・集成(四四頁)は後者を採るが、他は前者。「母屋の中戸より西に、殿の上おはする方にぞ」は、『源氏物語』の「きた山になむ、なにがし寺といふ所に、かしこきをこなひ人侍る」(若紫・一五一)などと同様、「(広い場

所)に、(狭い場所)に」と、格助詞「に」を重ねて場所を指示する用法で、「より」については前者とみておいて問題ないであろう。また、「わか宮は」は「わか宮をば」の意で、「おはしまさせたまふ」は、四段動詞「おはします」の未然形「おはしまさ」+使役の助動詞「す」の連用形「せ」+尊敬の補助動詞「たまふ」という語の組成。直訳すると「おいでになるようになさる」となるが、現代語では、尊敬語に使役の助動詞が付く場合、謙讓語を使うのが普通なので、「おはしまさす」は、「お迎える」「お連れする」などと謙讓表現に置き換え、さらに、動作をする道長への敬意を表す「たまふ」も付いているので「お連れなさる」「お連れ申し上げなさる」などと解するとわかりやすい。道長が若宮を倫子のもとに連れていくのである。『源氏物語』の「宮をは、御むまにて、くらさまぎれにおはしまさせ給て」(総角・一六一五)は、薫が匂宮を闇に紛れて宇治の山荘に「お連れなさる」のである。○うへ、外にいでさせ給てぞ 帝が、御簾の外にお出になられてから、宰相の君は紫式部らのいるこちらに帰つて来て、「たいそう目立って、きまりの悪い心地がしたこと」と、その言葉通り、赤面して座つていらつしやる表情が、繊細で、

美しく見える。「顕証」^{けんしやう}は、あらわな、いちじるしい、目に立つさま、をいう形容動詞。「けん」の撥音「ん」の無表記。「けせう」とも。「はしたなし」は、きまりが悪くて、いたたまれないようなさま、間が悪く、引つ込みがつかないさま、をいう形容詞。『源氏物語』に「けせうに、はしたなきさまには、えもてなし給はぬも」(宿木・一七五七)など。「げに」は、宰相の君の言葉を受けて、その言葉通り。「おもて」は、顔。顔面。「うち赤む」は、喜び、怒り、恥ずかしさのため、顔などが赤くなる。『源氏物語』に「にくみ給ふなよ、ときこえたまへば、おもてうちあかみて」(濤標・四九二)など。「かほ」は、上代、容貌の意でのみ用いられ、顔面の意を表す語としては、「おもて」が用いられた。中古になると、「かほ」が、顔面の意をも表すようになり、さらに顔の状態・様子「顔たち」「顔つき」「顔いろ」も表すようになる。『源氏物語』に「にほひやかに、うちあかみ給へるかほ、いとをかしげなり」(夕霧・三三四)など。○衣の色も、人よりけに、きはやし給へり 衣の色も、誰よりもすばらしく、見栄えがするようにお召しになっている。「けに」は、形容動詞「異(けなり)」の連用形。普通、一般とは違っているさま。他のもの

とは異なっているさま。ある基準となるものと比べて、際立っているさま。すばらしいさま。「人よりけに」「ありしよりけに」などと、多く「:よりけに」と連用形で用いられる。『源氏物語』に「みるめは、人よりけに、わかくをかしげにて」(若菜上・一一三)など。「きはやす」は、見栄えがするように着る。目立つように着飾る。

【参考】『栄花物語』に「との(道長)、わか宮(敦成)いだきたてまつらせ給て、御前にあてたてまつらせ給。御こゑ、いとわかし。弁宰相の君、御はかしとりてまゐり給。もやのなかののにしに、との、うへ(倫子)のおはしますかたにぞ、若宮はおはしまさせ給」(はつはな、二・四六七)など。

(本学教育学部・大学院文学研究科教授)